

参加者からの報告②

展示をどう考えるか

—福島県歴史資料館の試み—

福島県歴史資料館 渡辺 智裕

1 はじめに

福島県歴史資料館は財団法人福島県文化振興事業団傘下の文書館であり、このほかに福島県文化センター・福島県文化財センター白河館・遺跡調査部があります。この財団は福島県教育委員会生涯学習領域施設運営グループ管轄の外郭団体です。当館と福島県文化センターは別棟ですが同一敷地内にあり、両者の関係は、条例上は複合施設という位置付けになっています。

ところで公文書館・文書館等における展示業務の位置付けについては、周知のように様々な論者から多様な言説が提出されています。例えば、展示活動は本来的業務か否か、文書館の展示は記録史料管理論あるいは記録史料認識論によるか否か、展示技術論、史料保存論、等々…。このように文書館展示論は百家争鳴の様相を呈していますが、議論が活性化すること自体は社会における文書館活動を考えた場合、素直に歓迎すべきことのように思います。

2 展示活動

それでは、福島県歴史資料館の展示活動のコンセプトをみていきましょう。

- ①歴史資料展…年1回、秋に2か月以内の会期で行うテーマ展で、他館でいう企画展に相当します。収蔵史料以外に他の類縁機関や個人からも史料を借用し、簡単な展示図録を作成しています。また、テーマに合わせた外部講師や職員による地域史研究講習会を開いています。主な参加者は歴史や史料保存に関心のある方です。2004年度の場合、「ふくしまの医学史料」展（10.8～11.23）を開催いたしました。展示は記録史料認識論に基づくものです。
- ②テーマ展…年3回程度、担当者が各自の問題意識によりテーマを設定し、収蔵史料の中から展示構成を組み立てます。研究職の学芸員としては日ごろの

研究成果を県民に分かりやすく提示できる機会であり、向上心を持って取り組めばやり甲斐があつてたいへん勉強となります。一部記録史料管理論を加えたものもありますが、概ね記録史料認識論による展示です。

a 「暮らしの中の花」展（4.23～7.19）は前年度の「ふくしまの自然環境～江戸の博物誌～」展をうけて企画したものです。会期が長かったので、史料保存の観点から展示史料の9割を展示替えしました。b 「江戸人の奏でる調べ～時空を超える音色～」展（12.10～2.13）は、文部科学省が小・中学校の音楽教育において和楽器教育の方向性を打ち出したことを踏まえて企画したものです。c 「わが町の誕生～公文書にみる市町村合併～」展（3.4～4.17）は、文書館として「平成の大合併」とリンクさせた行政文書による展示です。これらは評価がよければ、数年後に①の歴史資料展へ発展する可能性もあります。

- ③新公開史料展…年1回、前年度の『福島県歴史資料館収蔵資料目録』に収録された史料群のお披露目的性格を持っています。古文書の寄託者や寄贈者に対して感謝の気持ちを表すと同時に、県民に対しては新たにこの文書群が実際に閲覧できるようになりましたとアピールする意図があります。文書群の構成が分かるように記録史料管理論的な展示をしているため、歴史にあまり関心のない人にとっては必ずしも満足するものにはなっていないようです。今年度は「わが町の誕生～公文書にみる市町村合併～」展を行うため、やむを得ず来年度に繰り越しとなりました。
- ④フィルム上映会関連展示…月1回、上映内容に合わせた収蔵史料の展示で、展示ケース2台分のミニ展示（史料8点程度）です。これまでのテーマ展の中から抽出し、テーマ展を構成するほどの史料点数がないもので行っています。館の存在を知ってもらうのと閲覧利用の増加を目的としています。記録史料認識論による展示で、その場でお客さんの反応を観察できるのが利点です。

3 テーマ展「暮らしの中の花」の具体的活動

この展示の最大のねらいは歴史や文書館に無関心な層を組織的に掘り起こし、文書館の存在や史料保存の重要性を理解してもらうことにありました。

まず、タイトルは無関心な人が見聞きして、足を運んでみようかなあと思う親しみやすいものにしました。歴史に不案内な人にも理解しやすい展示内容を

めざし、展示史料はビジュアルで史料コンディションのよいものを多く用いました。展示キャプションは口語調で遊びも取り入れましたが、質は落とさないように注意しました。また、お年寄りにも読みやすいように活字のポイントを大きくし、大ケース内のキャプションは壁面ではなく手前に置くようにしました。文書館における展示で重要なことですが、なぜこの史料がこの家に伝わったか、どのような家なのかなど、文書群の持っている固有の情報は必ず初出の史料でさりげなく解説しました。展示内容をさらに深めたいと思う方のために関連する図録や図書のコーナーを設けました。なお、当館も福島県の行政機関のひとつですので、福島県農林水産部生産流通領域が開発したリンドウのオリジナル品種「ふくしまかれん」の宣伝を積極的に行いました。

次に史料展示にふくらみを持たせて集客を図るため、これまでより多くの関連イベントを積極的に組み込みました。ギャラートークの回数を増やして2週間に1回とし、一方的な説明にならないように、お客さんとの対話を重視するように心がけました。エントランス・ロビーには福島地区華道教授連合会（6流派2回ずつ）のご協力によりいけばなを土・日に活かしていただき、華やかさを演出しました。これをデジタルカメラで撮影してホームページに掲載し、ロビーに写真パネルで張り出しました。さらに花器を作成した陶芸家・清水卯一と近藤悠三についての記録フィルムを2回無料上映しました。また、板谷波山とその妻を扱った鈴木まる（福島県会津坂下町出身）の生活を描いた記録風映画「HAZAN」を無料上映し、広報に力を入れたこともあって、当日は700人を超える入場者を迎えることができました。

4 おわりに

私は、「文書館展示はかくあらなければならない」という考えに陥らないように意識的に気を付けており、文書館展示論は多事争論でもよいのではないかと考えています。県民の目線に立ってフットワークを軽くしながらよいことは何でも取り入れていき、その結果として公文書館等の重要性を社会に認知していただければよいと考えています。最後に、文書館展示論に関心を寄せる全ての方に安村敏信『美術館商売（智慧の海叢書3）』（勉誠出版株式会社、2004年）の一読をお薦めしたい。